

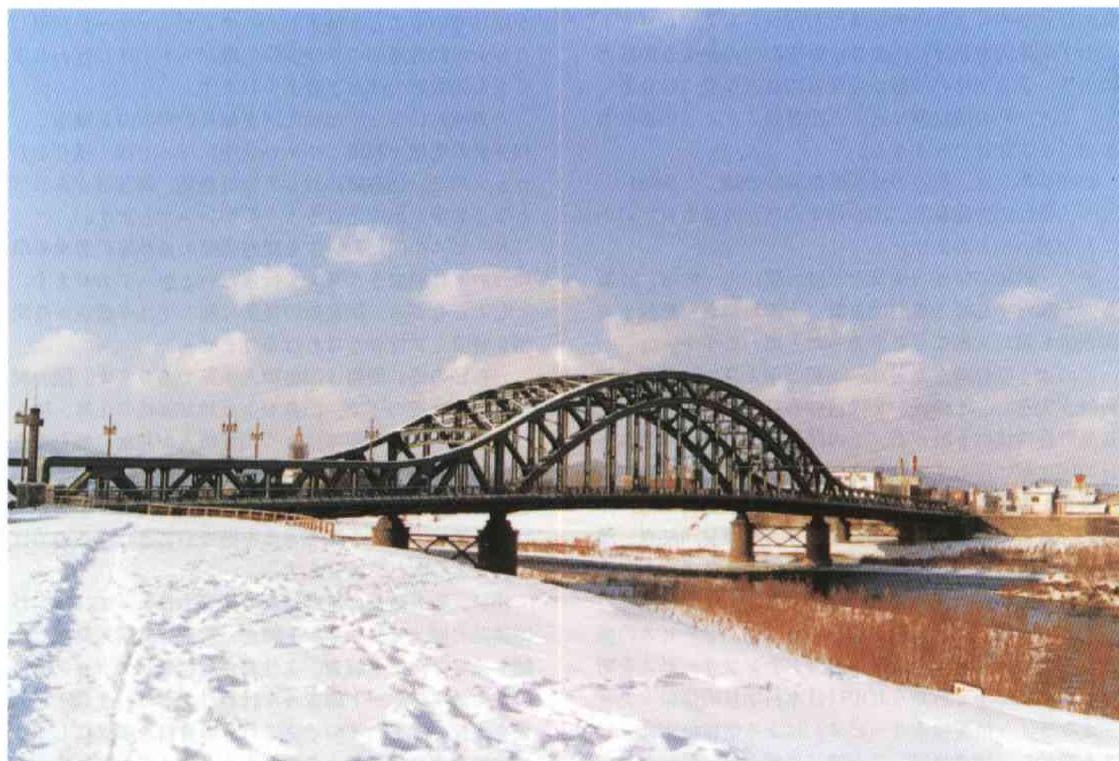
かぐらおが

第 42 号

昭和60年1月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 学生課 小濱郁子)

旭 橋

図書館長に就任して……………石橋 宏… 2	時計塔の設置について…………… 7
保健管理センター所長に就任して…保坂 明郎… 3	課外活動報告……………間宮 規章… 8
泌尿器科あれこれ……………八竹 直… 4	新入生研修(第2回目)…………… 8
「なぜ組織学へ?そして恩師のこと」…加地 隆… 5	体育大会…………… 8
昭和59年度通学方法・居住状況調査結果一覧… 6	福利厚生棟の増築について…………… 9
研究室紹介……………笹森 秀雄・安田 博… 7	課外活動短信……………10
解剖体慰霊式…………… 7	窓外……………小野 一幸…10



図書館長に就任して

石橋 宏

この度、11月1日付で星野図書館長の後任として図書館長の役目を仰せつかることになりました。もとより、浅学菲才の身でありますので学内の皆様の御指導、御叱責をうけながら、その責を果たしたいと考えております。

本学附属図書館は初代館長小野寺教授の絶大な御尽力により、全くゼロの状態から今日の立派な姿になりました。また、その間実務に当たった図書館スタッフの御努力も忘れることはできません。

昭和49年8月、現在の福利厚生施設の竣工と同時に、その二階に図書閲覧室、図書館事務室が設置されていたことが思い出されます。

また、昭和53年度の本学大学院設置に当っては、設置条件を満たすための専門図書数、学術雑誌数を整備する御苦労も誠に大変なことであったと思われまます。

このような経過をたどり、昭和53年4月に附属図書館新館が完成し、その後、2代目館長石井教授、3代目館長星野教授に引き継がれ、その間着々と整備がなされ今日の図書館に至っております。

現在、本学図書館が所蔵している和書は35,373冊、洋書43,347冊、併せて78,720冊であり、和雑誌485点、洋雑誌753点の多きにのぼり、新設の医科大学のうちで最も立派な図書館に育ってまいりました。

また、利用しやすい図書館をめざして、サービスの面においては、昭和53年5月からコンテンツサービスを開始し、昭和55年2月からJOIS(日本科学技術情報センターオンライン情報検索サービス)による情報検索サービスを開始し、図書目録、学術雑誌目録が毎年発行され、昭和54年5月から発行された図書館月報は現在でVol.6, No.7を数えるに至っております。この間に、図書の分類変更作業が行われ、医学専門図書の分類をNDC(日本十進分類)から現在のNLMC(米国国立医学図書館分類)に変更し、この作業は昭和56年3月に終了しております。昭和59年10月からはJOISオンライン検索で使えるデータベースが4つ増え、そのなかで医学・薬学関係の分野を対象としたEMBASEは、収録対象が広く、特に薬学分野に関する収録が多く、検索のためのキーワードが多いという特徴をもっております。従って、従来からのIndex Medicusをオンラインで探すMEDLINEとこのEMBASEの両方を利用すればより有効的なものとなります。

このように、着々とより良い図書館をめざしての努力が積み重ねられています。

医科大学における附属図書館の役割が如何に重要であるかはいうまでもありません。

日進月歩の学術情報、充分な専門図書、その他の資料が揃っていることが望ましく、コンピューターを利用した各大学図書館間の学術情報処理がスムーズに行われることも図書館の使命と考えられます。

その運営に当っては歴代図書館長の御意向を継承し、利用者の皆様が利用しやすい状態に保って行く積りでありますので、図書館に対しての御要望、御苦言があればどしどし申し出て下さるよう御願いたします。

サービスの面においても開館時間の延長等の懸案事項については前向きに考えていきたいと思っております。

しかしながら、図書館の運営に関しては今後色々な問題を解決して行かなければなりません。

一番頭の痛い問題は図書購入予算であります。国の緊縮財政の継続の下で、図書および雑誌価格の上昇、加えて為替レートの変動等により図書購入が非常に厳しくなっております。これに対処するためには、図書購入をおさえるか、または教官当積算校費の負担率を引き上げるかのいずれかを採らざるを得ないことになるのではないかと心配しております。

幸い、石井館長、星野館長の御努力によって、購入外国雑誌に関するアンケート調査、学術雑誌購入見直しに関するアンケート調査、より良い雑誌コレクション構築のためのアンケート調査等が行われており、それぞれ効果をあげてきているので、これらの資料を参考にしてこの危機を乗り切る努力を重ねようと考えております。

また、コンピューターを利用した全国的な各大学図書館間の学術情報処理システムの開発も急速に進められております。当面、北海道大学図書館が道内の地区センター館になるだろうと予想されています。これにも本学図書館として対応して行かなくてはなりません。

図書館としては色々な問題を抱えておりますが、学内の皆様の御理解と御協力がなければ解決できない問題ばかりです。よろしく御願ひ申し上げる次第であります。

最後に、学生諸君も本学の図書館を今まで以上に、そして有効に利用し学習にはげまれるよう期待しております。

(法医学講座 教授)



保健管理センター所長に就任して

保坂明郎

近年、学生・職員の保健管理の問題が真剣に取り上げられ、公私立を問わず全国の大学に続々と保健管理センターが設けられ、活発な運営が行われるようになって来ている。

当旭川医科大学でも、本年度（昭和59年度）からセンター設立が認められ、文部省から正式な予算もつき、59年4月から発足した。今回思いがけなく、初代のセンター所長に任ぜられることになり、急遽勉強中というのが現状である。先ず本学保健管理センター（以下センターと略称する）開設にいたる経緯を簡単に振り返ってみたい。

58年2月に、厚生補導委員会において、センター設置要求に必要な事項について検討を開始することになった。文部省基準や既設大学の資料を参考にして概算要求の原案などが着々準備された。

58年10月からはセンターが設置された場合のことを考え、具体案を検討する段階に入り、石井副学長を委員長とするメンバー5名の小委員会が発足した。この委員会は頻回の会議を持ち、保健管理計画および規程の原案を作成した。

58年12月の厚生補導委員会では、この規程案に沿って協力を求める医師、専任教官などについて審議され、大筋として次のことが了承された。(1)健康相談を実施する方向で考える、(2)健康相談室を設けるが、これについては病院側の協力を得ることが条件となる、(3)専任教官は学生の健康管理に熱意を持ち、精神衛生面についても対応できる人とする。

59年1月20日にセンター設置の予算が内示された。定員は講師（カウンセラー）1名、看護婦1名である。この内示にもとづき、上記(3)の専任教官は心理学専攻で、実務経験のある人が望ましいとの見解に達した（59年2月）。

3月に入り、教授会においてセンター規程等が制定され、4月12日には正式に旭川医科大学保健管理センターが設置され、石井副学長がセンター所長事務取扱いに任ぜられ、これに伴い、センター規程も同日施行されることになった。さらにセンター保健婦として玉川恵子（技官）が発令された（5月1日）。

センター関係の医師としては、既に学校医として決定されていた吉田征子医師（第二内科）のほか、病院長の推薦により、猪俣光孝医師（精神科神経科）、梅藤千秋医師（整形外科）、門 正則医師（眼科）、高橋光明医

師（耳鼻咽喉科）の4名が発令され（7月1日）、ついで保坂がセンター所長に併任発令された（8月1日）。

センターには、センターの運営に関する事項を審議するため、保健管理センター運営委員会が設けられることになった。そのメンバーは15名である。委員長（センター所長）、教務委員会委員より2名（現、美甘教授、大河原教授）、厚生補導委員会委員より2名（現、岩淵教授、山村教授）、附属病院運営委員会委員より2名（現、小野寺教授、宮岸教授）、担当医（現、前記5名）、カウンセラー1名（未定）、総務部長、教務部長である。

本委員会の第1回会合は10月31日に行われた。先ず石井副学長からセンター設置にいたるまでの経過概要の説明があり、センター工事は10月に着工し、3月完成の予定（総面積 220㎡）であるとの報告があった。

ついで本年度学生健康診断の実況が報告され、さらに既に毎日開設されている看護（救急）業務の実態の報告があった。センターとしてはなお準備段階であり、必要器具も不備な状態であるが、利用者数は予想以上に多い状況が説明された。

以上のように、センターとしての実務の一部は既に始まっており、不十分ながら、学生および職員の1部にかなり利用されている。医師相談日は次のとおりである。内科、毎週水曜12～14時、精神科神経科、毎月第1水曜12～14時、整形外科、毎月第2月曜12～14時、眼科、毎月第3月曜14～16時、耳鼻咽喉科、毎月第4木曜12～14時。

これらの実情については、相談時間など問題点もあるかも知れない。しかし幸いなことに本学は単科大学であり、学生も職員もお互いに顔見知りが多いという点もあって、実際問題としては、今のところ、それほど困難な状況は起っていないようである。とはいえ、正式にセンターとして発足したからには、出来るだけ関係諸氏の要望を入れて、よりよい施設として充実させたいものと願っている。

この11月下旬に神戸において、全国大学保健管理センターの協議会が開催される予定である。これには各センターの現場報告、健康管理成績の実態その他の詳しい報告が多数予定されている。この会議の内容から、私なりに、今後の保健管理センターの歩み方を少しでも勉強出来ることを楽しみにしている。

（眼科学講座 教授）



泌尿器科あれこれ

八 竹 直

旭川医科大学には泌尿器科学会の重鎮であられる黒田一秀学長がおられるので、若輩が泌尿器科を云々するのは憚られるのですが、早いもので泌尿器科を専攻して20年目になったのを機会にちょっと振り返ってみたいと思います。

さて、泌尿器科という言葉聞いて皆様はどういう印象を持たれるでしょうか。少くとも20年前の私の周囲は、あまり良い顔はしませんでした。

泌尿器科を専攻しようと思ったとき家族は「そんなきかない科、やめときよ！ やめときよ！」と反対したものです。その上、インターンで1年間お世話になった某大病院の副院長先生までが「どうしてそんな科を選ぶのですか」と眉をひそめられたのにはショックを受けたのを今でもはっきり覚えています。当時は医療関係者でも泌尿器科に対する認識はその程度のものであったようです。

恐らく、性病、華やかなりし頃の泌尿器科に対するイメージが強かったのかもしれませんが、また、今ほど人口の老齢化が強調されていたわけでもなく、必要性が強く求められていなかったのかもしれませんが。

ここまで書いて今日11月15日の読売新聞一面のコラム「編集手帳」を読んで驚いた。趣旨は最近の病院は気がばりがないということを書いてあるのですが、その例として、ただでさえはずかしい泌尿器科の前に坐っている時に姓のみならず名まで受付けで呼ぶとはなにごとかということが書かれています。そんなに世間一般では泌尿器科とは、はずかしいところなのか。私はこの文章に対して告訴したいような憤りを感じる一方、世の認識が今でもこの程度なのかと、非常に落ち込んでしまっています。

さて20年前、大阪大学の泌尿器科は現大阪大学泌尿器科教授の園田孝夫先生が米国から帰って来られ、腎移植が始められ、尿路結石に関しても副甲状腺手術が軌道に乗ったりで、非常に若々しいエネルギーにあふれていた教室でした。若気のいたりだったかもしれませんが、この泌尿器科学は私には非常に魅力的に思えたのです。

この泌尿器科領域も各科と同様、この20年間に非常に大きな変貌を来しました。

診断技術の分野では、内視鏡のすばらしい進歩があげられます。膀胱鏡は恐らく色々な内視鏡検査のなかでも最も古い歴史をもっているものの一つです。

書物によりますと Bozzini が1807年にすでに発表しているとの事ですので、かれこれ 180年の歴史をもってい

ます。しかし私が入局した20年前は膀胱鏡の先端にある豆電球の明かりで膀胱内を観察していました。今のファイバースコープを利用したキセノンランプの明るい光での検査に比較すれば、まさに蛍の光窓の雪といった感じでありました。道具も、うんとスマートになりました。しかしこの検査は相変わらず患者さんには評判がよくありません。まだまだ改良が必要なのでしょう。さらに診断の分野で画期的であったのは、各科同様、CTおよび超音波診断の進歩の影響です。これによって泌尿器科領域の診断力は数倍上昇したといえます。たとえば教科書では腎癌の症状は血尿、腹部腫瘍、腎部の疼痛となっています。しかし、これらの症状を何も示さない腎癌がCTや超音波診断によって続々と発見されるようになっていきます。

治療の面では、なんといっても内視鏡手術の発展をあげねばならないでしょう。私のインターン時代、外科に來た老人が、最近排尿困難が強いと切切と訴えたのですが、「そりゃ、年のせいやで！」と一言ですませられ、気の毒に思ったものでした。当時、前立腺肥大症は開腹による手術が主で、麻酔管理も進んでいなかった事もあり、あまりリスクの高い人はカテーテル留置などの消極的な治療しか行なえなかった症例が多かったように思います。もちろん切除用膀胱鏡による経尿道的切除術(TUR)も、日本でも始められてはいました。しかしその教育方法は古めかしく、先輩の背中を見て覚えろといわれ、なかなか会得しにくい状態でした。それが最近では、なんと卒後3、4年でなんとかTURによる前立腺腺腫の切除が出来るのですから驚きです。

さらに、最近では超音波を利用して体外から腎臓に穴だけあけ、この穴に挿入した内視鏡を利用して腎臓の結石を摘出したり、超音波振動で結石を砕く試みがブームになってきて、われわれの教室も今これに熱中しています。札幌の某病院に設置されたと聞く、衝撃波を体外から腎結石にあてて、体を傷付けずに結石を碎石排除する方法も含め、泌尿器外科は開腹手術から、より高度でかつ侵襲性の少ない治療へと技術革新が進行中です。

さて次の10年、20年泌尿器科学はどうなっているのか楽しみな様でもあり、空恐ろしくなる今日此の頃です。

(泌尿器科学講座 教授)



「なぜ組織学へ？そして恩師のこと」

加 地 隆

過去を思案する者は片眼を失い、過去を忘却する者は両眼を失うという意味の言葉があるというが、学生諸君によく「先生はどのように組織学（あるいは解剖学）の道に進まれたのですか？」という質問を受けるので、この事を中心として思い出すがままに書いてみようと思う。私は生来自然が好きであり、又本を読んだり考えたりする事も好きな性格であった。砂川がまだ町であった頃そこで生れ育ったが、石狩川のそばにあった私の家の周囲のささやかな自然は子供には充分に変化に富んだもので、鳥・魚・虫そして種々の植物、川や沼、四季に伴う自然の移り変わり、洪水や吹雪の猛威等と子供の好奇心を引くものがふんだんにあった。自然と一体になった時、あるいはその中に様々な発見をした時に心の底から湧き上がる喜びは例えようもないものであった。この頃に培われた自然に対する親愛感が後になって私の心の深い部分で私に研究者になるように命じたのではなかろうかと思われる。長じて北大に入学してからは、息抜きも相当したが、小説、哲学及び自然科学書等と、ともかくかなり多くの本を読み、夏休み等には毎晩のように徹夜で読んでは昼過ぎ迄眠るという生活をしてきた記憶がある。よくわからないままに読んだアインシュタインの「物理学はいかに創られたか」やベルグソンの哲学書等を通じて時間というものにより深い興味を持ったのもこの頃の事であった。時間と組織学との関連の問題は今なお私の好きな研究テーマの一つである。その頃読んだ数多くの基礎医学関係の書物を見てみると、研究者を無意識のうちに志向していた自分が眼前に浮んでくるような気がする。講義が進むにつれて私には基礎医学の研究が非常に魅力的なものに見えてきたが、中でも組織学・生理学・生化学・薬理学等は互に関連性があり、特に興味を持った課目であった。恩師の伊藤 隆先生が担当された組織学の講義は、高度な内容を平易に解説され、しかも清新の氣に満ち、学生を鼓舞せずにはおかない名講義であった。又その独特のユーモアに富んだ話しぶりは聞くものに親しみを感じさせ、強く引きつけたものであった。特に研究の話と関連して「私は人のやらない事をやりたい。」と話された一言は今なお強く印象に残っている。5～6年生の頃、そろそろ将来の進路を決めなければならない段階になった時、自分にはどのような才能があるのか、何ができるのかを自問してみた。意外に悲観的材料が多い中で、希望のもとそうな点の一つがあった。それは先に述べたように子供の頃に培った自然観察の能力で、これは

同時に私の強い好みでもあった。好きな事を一生の仕事に出来ればそれこそ幸せというものである。更に私はゆっくりとマイペースで仕事のできそうな組織学の方により強い引力を感じた事もあった。5年目の春休みにスキーで骨折してベッドに寝たきりになった私は、伊藤先生から偶々医学部新聞で見かけて知っていたパーネット教授退官記念シンポジウムの記録「胸腺」（この中には先生御自身の発表も載せられていた。）をお借りした。不慣れた英文を読みながら、現実形態学的研究が医学研究の最前線で大きな役割を果たしている事を目のあたりにして感激し、希望と意欲が強く湧くのを感じた。そこで骨折も治った6年目の夏休みに伊藤先生にお願いして1週間程研究のまね事をさせて頂く事にした。マウスの頸動脈小体を特殊な液で固定してその切片を作製するのであるが、ものが非常に小さいためそれだけを取り出す事ができず、頸動脈の分岐部をめがけて連続切片を作らねばならなかった。初めての事なので随分手間どり、一例目は失敗、二例目をようやく切り終えた時は夜の11時過ぎで、先輩のG先生に車で自宅迄送って頂いた事をなつかしく思い出す。翌日染色をして目指す小体を顕微鏡下に見た時のうれしさは終生忘れる事ができない。その夏休みは、頸動脈小体をうまく見る事ができ、又先生が組織の形態・構造に限らずその機能や病気に迄興味をもたれている事を確認してすっかり楽しい気持ちになって帰省した。ともあれ古ぼけた木造の建物の中に研究という清流がさらさらと流れているという雰囲気は忘れ難い印象となつて、私の気持ちを更に強く組織学の方へと傾けたのであった。このような経緯で翌年卒業後伊藤先生の主宰する第三解剖に入れてもらった訳である。以上研究者になるに到った一例として私の場合を述べてみた。翻って現在迄の私の研究を見てみると、松果体・副腎髄質及びそれらの相関関係に関する時間生物学的研究や精巢・精巢上体の実験病理学的研究等とほぼ所期の希望に近い事ができた事は、伊藤先生を始め松嶋先生、Dr. Quay 及び先輩や同僚等のお陰と感謝している。最後に昨年の国際細胞生物学会議の開会講演で Dr. Bennett により引用された「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」という芭蕉の言葉を嘯みしめながら今年も一步一步進んで行こうと思う。

（解剖学第二講座 助教授）

昭和59年度通学方法・ 居住状況調査結果一覧

昭和59年度通学方法・居住状況をまとめましたので掲載します。

(学生課)

昭和59年6月1日現在

アンケート提出率

学 年	1						計	大 学 院				計
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	
在籍学生数	131	134	121	124	118	117	745	12	13	13	19	57
アンケート提出数	70	97	83	95	71	75	491	10	5	6	8	29
提出率(%)	53.4	72.4	68.6	76.6	60.2	64.1	65.9	83.3	38.5	46.2	42.1	50.9

通学方法のまとめ

方法	学 年						計	大 学 院				計
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	
徒 歩	31	28	11	13	11	7	101 [20.6]	5	1	1	1	8 [27.6]
自 転 車	26	30	15	21	3	1	96 [19.6]					
バ ス	7	3	4	1	1	3	19 [3.9]	1				1 [3.4]
バ イ ク	任意加入	1	4	9	7	4	26 [5.3]					
	非加入	3	8	6	8	5	34 [6.9]					
自 動 車	任意加入	1	14	31	39	42	177 [36.0]	4	4	5	7	20 [69.0]
	非加入		1				1 [0.2]					
自動車相乗	1	8	7	6	5	9	36 [7.3]					
国 鉄		1					1 [0.2]					
計	70	97	83	95	71	75	491	10	5	6	8	29

[] は百分率



居住状況のまとめ

居住状況	学 年						計	大 学 院				計	
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4		
自 宅	10	14	13	21	13	15	86	1	1			2	
親戚又は知人宅		1	1		3	2	7					1 1	
下 宿 (光熱水料 込み)	~4.5畳	~40,000		1		1	2						
		~45,000					1	1					
		~50,000	1	1				2					
		50,001~											
	~6畳	~40,000	2	2	3	7	1	7	22				
		~45,000	11	29	13	16	4	6	79	1			1
		~50,000	14	5	4	3	1	2	29	1			1
		50,001~	6						6				
	~8畳	~40,000			1			1					
		~45,000		1	1	1	1	4					
		~50,000	3	2	1	1	1	8					
		50,001~				2		2					
8畳~	~40,000												
	~45,000		1		1		2						
	~50,000		1				1						
	50,001~		6	1			7						
間 借 ・ ア パ ー ト 借 家	~6畳	~20,000		2	1	3		6					
		~30,000	3	1	1	3	1	2	11	1		1	
		~40,000	1						1	2			
		40,001~											
	~12畳	~20,000		1	3		2	2	8				
		~30,000	6	10	7	12	6	11	52	1		1	2
		~40,000	6	5	7	3	9	3	33	1		2	3
		40,001~	4	1	1		2		8				
	~18畳	~20,000			2	2	3	1	8				
		~30,000		1	3	1	1	2	8	1	1		2
		~40,000	2	11	7	10	15	9	54	3	1		4
		40,001~			1				1			1	1
18畳~	~20,000			2			2						
	~30,000			3		1	1	5			1	1	
	~40,000			3	3	2	6	14		1	2	3	
	40,001~		1	2		1	1	5			2	1	
~12畳	~20,000												
	~30,000												
	~40,000												
	40,001~												
~18畳	~20,000		1				1						
	~30,000					1	1						
	~40,000				4		4						
	40,001~												
18畳~	~20,000				1		1	2					
	~30,000					1	1						
	~40,000			1			1						
	40,001~											1 1	
道営・市営住宅	1			1	1	2	5		1		2	3	

研究室紹介

■ 社会学 ■ 笹森 秀雄

社会学は、昭和48年9月29日、国立学校設置法が改正されて旭川医大が設置された際、一般教育科目の社会学系科目の一つとして認められ、その担当教官に私が発令され、現在に至っている。なお本学科目の担当教官は、基礎教育科目の中の「医療社会学」と「生態学」の講義を担当するほか、「社会学総合講義」の世話役をも行うことになっている。社会学は具体的な社会事象を調査分析して、そのなかからある種の傾向性や問題性を析出する実証的な経験科学であるから、学生諸君の教育に当っては、単に知識の習得のみに目標をおくことなく、学生諸君が更に進んで、自分自身が興味をもっている問題、あるいは疑問に思っている問題の一つを選択し、それを実際に調査分析して、一年間の学習の総決算にするよう指導している。また医療社会学では、講義のほか、重症心身障害児施設や特別養護老人ホームなどの見学学習を通じて、医療や福祉の問題に深い関心を払うよう努力している。

研究面では、私の専門が地域社会学であるところから、主として都市と村落の研究に比重がおかれ、そのため暇をみつけては道内各地に出かけている。しかし研究は私一人であるため、遅々として進まぬのが残念である。

(社会学 教授)

■ 数学 ■ 安田 博

学科目「数学」は、昭和48年9月、本学設置より約半年遅れて昭和49年4月に設定され、その担当として私が赴任した。それ以来ずっと私一人が当研究室の人的構成である。実は複数の人的構成が可能であるという前提で、赴任したのだが、それが不可能であることが後になって分かった。このことは教育上においても、研究上においても、特に後者においてはその幅を抑制せざるを得ないということの意味する。数学の分野は純粋数学、応用数学の二つに大別することができる。一学年目に開講した数学はそれらの基礎部分にあたり、さらにその医学への応用は、応用数学の領域に入るであろう。

私の研究テーマは、計量幾何学、とりわけ「フィンスラー幾何学及びその応用」(幾何学の一分野)である。当初は「多変量解析及びその応用」(応用数学の一分野)も考えていたが、前述の理由で断念せざるを得ない。前者は主として日本及びヨーロッパの学者によって研究されている。私も毎年春秋二回の日本数学会では、その研究成果を発表し、その論文を国際誌や本学紀要等に掲載している。またヨーロッパで開催されるこの分野の学会にも出席し、論文発表、討論に加わっている。

(数学 教授)

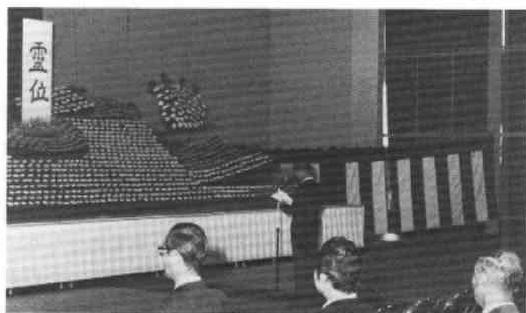
解剖体慰霊式

昭和59年度解剖体慰霊式は9月26日(木)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

菊を並べた祭壇を前に参会した御遺族・来賓・本学教職員・第3学年学生300名は、本学学生の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた141名(病理解剖79名、法医解剖34名、系統解剖28名)の方がたの御遺徳を忍び御冥福を祈念しました。

式では、解剖体御芳名奉読、黙とう、学長・学生代表(3年 野津 司君)の追悼の辞のあと、参会者による献花が行われ、吉岡副学長の謝辞をもってしめやかなうちに今年度の慰霊式が終了しました。

(学生課)



時計塔の設置について

本学の同窓会から5周年の記念事業として時計が大学に寄贈され、10月29日(月)管理棟前庭に時計塔が建った。

時計塔は高さ約10mで3方に時計が付き太陽電池によって作動し大学の森をバックに美しくそびえ立っている。

(学生課)



課外活動報告

シリーズ7 弓道部

東医体を主管して 間宮 規章

昭和59年7月24～27日、旭川市総合体育館で我弓道部主管の下、東医体弓道部門が開催されました。日程の概要は次の通りです。24日、射場設営、付矢（練習日に相当）、25日開会式、団体戦前半、26日団体戦後半と個人戦前半、27日個人戦後半、閉会式、射場撤去そしてレセプション。（尚、射場設営と撤去には、スキー部ラグビー部の応援を仰ぎ、試合運営には、市内の高校弓道部員他にアルバイトをお願いしました。）

私達の活動は、会計が決算報告を終える10月まで、計20ヶ月ほどかかったわけですが、その内容は、準備組織としての活動、大会運営組織としての活動、そして大会参加選手としての活動などであり、それらは、性質上試合直前～試合期間中に重複せざるを得ないものでした。そんな目の廻りそうな忙しさの中で団結力を培ったのが幸いしたのでしょうか、はたまた竹内当時主将の唱えた秘密練習が奏効したのでしょうか、我部は次のような戦績を納めることができました。即ち、団体優勝し尚6人チーム中3人（5年木津、工藤、6年小村）は敢闘賞、女子個人優勝（3年笠井）、新人賞（1年池田）がそれぞれです。

勝負は時の運、弓道にもそのような一面を否めないとするれば、事後その勝因を分析するのにどれほどの意味があるのかわかりませんが、この年私達は他に次のような成績を残しています。即ち、全道学生弓道選手権大会（室蘭）団体準優勝、全医体（山口）準優勝、全道学生弓道争覇戦（札幌）3部リーグ優勝、などです。（全医体出場にあたり各方面に御援助いただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。）

さて例年になく回数が多かった戦勝コンパで、うすくなる一方のサイフが、奇跡もこれだけ続けばこそ奇跡なのでは、そんなうれしい悲鳴を上げたことは言うまでもありませんが惜敗に落涙し、捲土重来を誓った試合もなかったわけではありません。また弓道が個人技という一面を強く持っている以上諸先輩の築いた実績に甘えることなく、我々は自分自身の向上を目ざさねばなりません。その意味で我々は常に未知数の明日こそが創立10周年を迎えた弓道部の課題であると考え鍛練を重ねている毎日です。

（弓道部 副将）

新入生研修(第2回目)

4月に行われた第1回目の新入生研修に引き続き第2回目の新入生研修が10月29日(月)～11月2日(金)(水は除く)までの4日間行われた。

1年生全員が8グループに別れ教授2名、学生約16名を1グループとして、一般教育会議室と、本学職員研修施設で午後5時10分から約2時間にわたり、なごやかな雰囲気の中で、会食・懇談が行われた。

（学生課）



体育大会

9月5日(木)学生主催の体育大会が行われた。当日は天候に恵まれ、学年対抗5種目、有志対抗2種目で学生、教職員、延べ700名の参加により行われた。

結果は次のとおり。

学年対抗

サッカー	1位4年	2位5年	総合 優勝 3年 2位 2年
バスケット	1位3年	2位2年	
駅伝	1位4年	2位1年	
すもう	1位3年	2位2年	
2,000mリレー	1位3年	2位1年	

有志対抗

ソフトボール	1位	カバサンチーム
	2位	ダンクショット
バレーボール	1位	漢字博士
	2位	のびのびバレーチーム

（学生課）



福利厚生棟の増築について

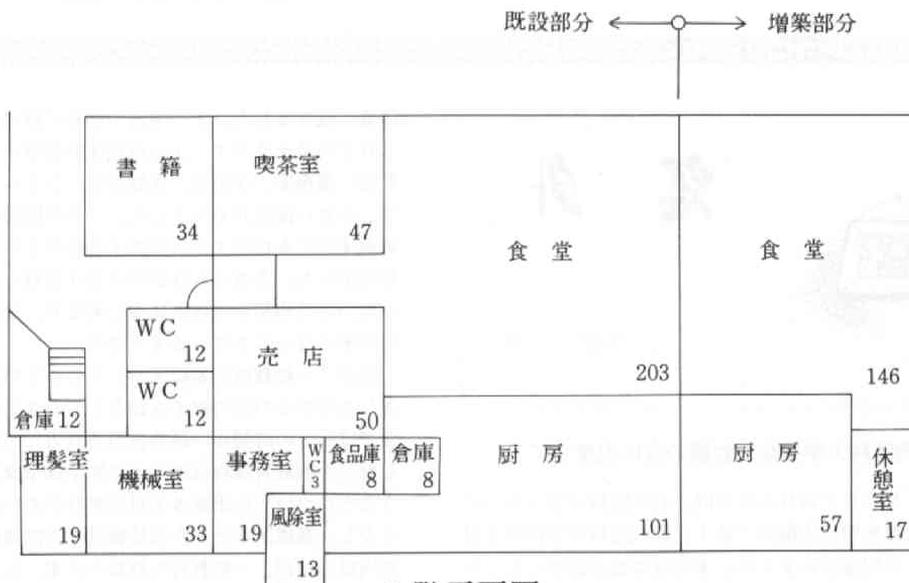
保健管理センターが設置されたことに伴い、同センター施設新営及び食堂拡張等のため福利厚生棟が増築(1・2階各220㎡)されることになり、60年3月9日竣工の予定で工事中です。

これにより、食堂は200席から244席、喫茶コーナーは1階食堂部分に移設し、36席(食堂とのオープン方式)、書籍売店は28㎡から34㎡に拡充される等別図のとおり福利厚生施設の整備充実が図られることとなります。

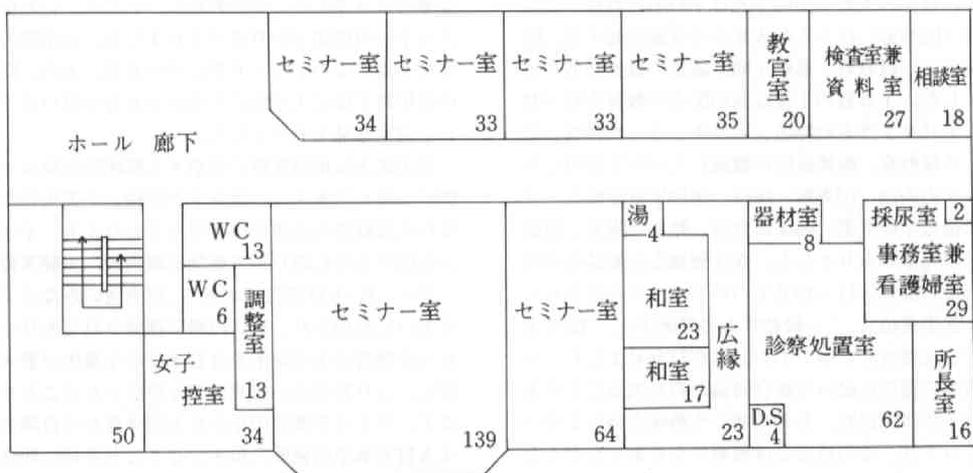
また、食堂については、この機会にカフェテリア方式を取り入れメニューの改善・充実を図ることを検討しております。

工事のため12月20日から3月9日までの間は食堂、売店、書籍売店の営業が出来なくなりますので、代替する場所として、食事は喫茶ホール・第5セミナー室、売店は第1セミナー室、書籍売店は第2セミナー室をあてることになりましたので、ご迷惑をおかけしますがよろしくご協力をお願いいたします。

(学生課)



1階平面図



2階平面図

課外活動短信

ラグビー部

東日本医科学生総合大会(冬季)ラグビー部門

(於 山形大学医学部グラウンド)

成績 4位

2回戦 18-0 (慶 応)

3回戦 34-3 (埼 玉)

準決勝 0-27 (順天堂)

3位決定戦 0-20 (新 潟)

陸上競技部

秋季北海道学生対抗選手権大会

400mH (3年)野津 司 59'2 2位

やり投 (3年)横田 英典 44M10 3位

将棋部

高橋道雄王位の「学校訪問」により来学、将棋部員5名と5面指しが行われた。(於 本学和室)

山口 亮・興水 修一・有岡 秀樹

増川 才二・岡本 清貴



国内医科大学視察と討論の会に出席して

去る7月13日と14日の2日間、自治医科大学において医学教育振興財団主催の「第4回国内医科大学視察と討論の会」が開催されました。本年度は私が出席しましたので報告を兼ねその時の印象等を述べさせていただきます。財団から懸田理事長ほか4名、文部省から上杉医学教育課長補佐、自治医大から中尾学長ほか17名の教授、全国医科大学(医学部)のうち42大学からは副学長4名、医学部長1名と一般教育、基礎・臨床講座の教授45名が出席致しました。1日目の午後は自治医大の教育内容(教育目標、カリキュラムの特色、カリキュラム外教育、学生生活、卒業教育、附属病院の概況)について説明があった後、学内施設(図書館、病院、地域家庭診療センター、医学情報学研究室、臨床研究室、動物手術室、組織実習室)の見学がありました。夜は懇親会と懇話会が開かれました。翌日は11-16名ずつのグループに分かれて「入試と学生生活」、「一般教育と基礎医学」、「臨床実習」と「卒業教育」についての討論が行われました。それらの討論の報告に続いて総合討論があり閉会になりました。今まで研究以外、あまり関心や興味を持たなかった私にとっては、この様な会は参考になりましたがかなりきつい時間を過ごした感じがしました。

学内の見学で、胸部外科学講座の設備の整った動物手術室で学生(4人1組)が犬の胸部手術をしていた事は

印象に残りました。この実習で極めて良い教育効果が得られているそうです。また地域家庭診療センターには診察室、薬剤室、手術室、保健婦室、トイレ(検査の為)等、小さい部屋がありました。一人の医師が各科の診療、調剤すべてを担当する自治医大独特のもので地域医療の縮図でした。患者さんは診療や薬を受取るまでの待時間が短いので当初の主旨とは少し異なり、学内関係者の利用が多くなってきているそうです。

私は「一般教育と基礎医学」についての討論に出席しましたのでその会の様子を紹介しておきます。この討論会では殆どの時間が一般教育のあり方について使われました。一般教育課程はあくまで医学進学課程であると言うことについては出席者全員に異存がありませんでした。しかし、基礎医学とまた高校教育との関連における教育内容の検討、一般教育の教員の人事、また楔形教育システムの再検討等々が、かなり激しい口調で討論され驚かされました。他の多数の大学においては極めて重要な事のようなものでした。卒業教育については、いわゆる臨床系大学院の問題がとりあげられました。大学院の4年間は短か過ぎるので5・6年にすべきだ。また、初期研修の2年終了後に大学院に入学させた方が良いのではないかと言う意見もありました。

自治医大は地域医療に従事する臨床医の養成を教育目標にしておりますが、他大学と同様、卒業生のなかから優れた後継者の出現を待ち望んでおります。本学には幸い全国の大学に誇り得る動物実験施設、実験実習機器センター、R・I研究施設があり、研究者のみならず学生にも大いに利用され、実に円滑に運営されております。これらの施設を大学院生を含む本学の卒業生が最大限に利用し、より質の高い研究論文が作成されることを希望します。そして卒業生の中から人間味豊かで良識ある優秀な人材が本学の発展の担手になることを切に期待して止みません。

(解剖学第一講座 教授)